村山民俗学会

第389号
発行日　2024年3月1日
発行責任者　岩鼻 通明
編集担当　岩鼻通明

## 加藤和徳氏を偲ぶ

菊地和博

忘れもしないその日は、昨年（令和5年）の10月25日だった。元副会長加藤和徳氏の最後の著作となった『里山の民間信仰』が新聞紙上に掲載された日である。私は加藤さんに拙評をお詫びしながらいくらか感想も聞きたいと思い、携帯電話を鳴らした。ところが電話の向こうの加藤さんは激しく咳き込んでいる。「急に息が苦しくなって救急車で病院に運ばれた」とのこと。数日後に病床にかけつけたが、ベッドに横たわる体はまったく起き上がることができない状態に衝撃を受けた。

加藤さんとは、近年長井市史の編集・執筆委員として時折顔を合わせていた。ある日お互いが調査中にバッタリ出会った。加藤さんは奥様が運転する自家用車で石碑を調べ歩くことを繰り返していた。奥様の献身的な姿を目の当たりにして、実に羨ましいと思ったものだ。加藤さんには昨年7月2日に東根市で行われた山形県地域史研究協議会の第1分科会で「東根市の石造文化財」を発表していただいた。その夜は遅くまで酒を酌み交わしたが、それが最後になろうとは想像だにしなかった。

加藤さんからは、「蓬莱波形山文庫叢書」23冊と「蓬莱波形山文庫」6冊ご恵贈にあずかった。上記『里山の民間信仰』はその「蓬莱波形文庫」7冊目にあたる。叢書と文庫合わせて30冊もの著作を上梓されたのは驚異的である。拙評では「16年間にこれほどまで精力的に調査研究の成果を書籍化した郷土研究家は稀である」と記した。頂戴するたびにお礼の電話を差し上げてつい長話しとなったことは、じつに楽しい思い出として心に刻まれている。

途中で病院が代わり、親族以外はお会いすることが出来なくなったので、病院専用のメールで励ましの言葉を伝えていた。それへのお礼だったのか、12月下旬頃に加藤さんから携帯に突然電話が入った。でもほとんど言葉を発しないまま切れてしまった。最後の別れを告げたかったのだろうか。加藤さん、日々の調査とご執筆本当にお疲れさまでした。安らかにお眠り下さい。心よりご冥福をお祈り致します。

元村山民俗学会員の志賀祐紀です。

加藤先生がご逝去なされたとのこと、お知らせいただきありがとうございます。まだまだお若いのに、本当に言葉が見つかりません。

加藤和徳先生には、ムカサリ絵馬展やオナカマ調査をはじめ、私が山形にいたころは私の調査に常に寄り添っていただき、多くをご助言いただきました。お電話すると、いつも明るく元気のよい声で出てくださったのが、まるで昨日のようです。

特に、オナカマ調査では、オナカマの記憶のある知り合いの方々をご紹介くださり、加藤